図書館だより Library Information

市内図書館
- ○中央図書館（LICはびきの内）　軽里1-1-1　☎950-5501
- ○陵南の森図書館　島泉8-8-1　☎952-2750
- ○羽曳が丘図書館　羽曳が丘西2-5-1　☎957-5553
- ○丹比図書館　樫山251-1　☎937-2355
- ○東部図書館　古市1541-1　☎950-2002

開館時間…10:00～18:00(※中央図書館は10:00～20:00)

ブックステーションはびきのコロセアム　☎937-7210(火・木・金曜日　13:30～16:30)
ブックステーション野々上東　☎950-5501(月・水・金曜日　13:30～16:30)
ブックステーション青少年児童センター　☎952-0032(月～土曜日　9:00～17:00)
古市図書館　☎958-0050(水～日曜日　10:00～17:30)

読んでみませんか？　～新刊案内～

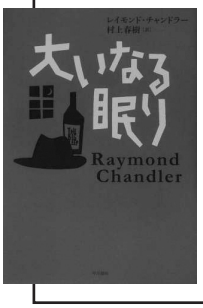
『一さつのおくりもの』
森山 都／作　講談社

くまたが一番大切にしている絵本は『かいがらのおくりもの』。もう内容は全部覚えているけれど、毎日一度は声に出して読むくらい、大好きな本でしたが･･･。

『くらしの折り紙とちょこっと紙小物』
主婦の友社

ポチ袋、ブックカバー、箸置きなど、覚えておくと便利な折り紙や紙小物がいっぱいの本。読むだけではなく、ぜひ1つはマスターしてください。

『大いなる眠り』
チャンドラー／著
村上　春樹／訳 早川書房



私立探偵フィリップ・マーロウが活躍するシリーズの第一作にして、ハードボイルド小説の原点といわれる一冊です。村上春樹の新訳でお楽しみください。

『わたしのゆたんぽ』
きたむら さとし／作・絵
偕成社

女の子はあったかい湯たんぽが大好き。でも、湯たんぽは女の子の冷たい足にくっつかれるのが嫌いで、ある日とうとう、布団から逃げ出してしまいます。

おはなし会

2月　3日(日)	陵南の森図書館	14:00
2月　9日(土)	羽曳が丘図書館	15:00
2月10日(日)	陵南の森図書館	14:00
2月13日(水)	東部図書館	10:30
2月16日(土)	陵南の森図書館	15:00
2月16日(土)	古市図書館	15:00
2月17日(日)	陵南の森図書館	11:00(小さい子向き)
		11:30(少し長いお話を聞ける子向き)
2月23日(土)	丹比図書館	10:30
2月23日(土)	羽曳が丘図書館	15:00
2月24日(日)	陵南の森図書館	14:00
2月3日(日)、10日(日)、17日(日)、24日(日)	中央図書館	13:30

今月の休館日
2月28日(木)

図書館は月末日を除き、日曜・祝日も平常どおり開館しています。

サラダボール

ある日の夜、同居の父が着替えなどをカバンにつめて「帰らせていただきます。」と頭を下げた。自宅から出ていくと言ってきかない。自分が誰であるのかが分からないようで、ここが父の自宅であることを説得しても理解してくれない。母のことも自分の妻であることが分からないという。二男である私の名前も、息子であることすら分からなかった。認知症の症状が月日を重ねるごとに悪化し、昼夜を問わず徘徊を繰り返すなどしていた父であったが、こんなことが現実に起きるとは家族の誰一人として思っていなかった。その日以来、父は私のことを“大将”と呼ぶようになった。どうも、私がこの家の最も偉い人で、父は私に雇われている家事労働者と認識しているようであった。自宅の外で何か声が聞こえるので窓越しに見ると、「大将、すいませんでした。これからも、この家に居させてください。」と、道から自宅に向かって叫んでいる父がそこにいた。母に対しては、「大将は本当に偉い人や。」と泣きながら絶賛したり、「大将に木刀で殴られた。」と訴えたりする日もあった。

勤めていた頃の父は、日本の高度成長期を支えた製鋼所の労働者として、残業や休日出勤なども当然のことのように、長時間労働に耐え、働き続けていた。勤続40年ほどの会社を定年退職後も、69歳まで関連会社で勤めた。そんな仕事人間であった父の完全な退職後の自宅暮らしにおいて、その楽しみは酒とテレビだけであった。そんな状況でも、「十分に働いたんだから、それが楽しみなら、それはそれでいいか…。」と、家族は見守っていた。そして、このような事態になってしまった。あんなに働きに働いた父が、やっと悠々自適に、のんびりと、心静かに、思うまま過ごすことができるようになったというのに、認知症という病の仕業で、父は労働者に戻り、雇用主である“大将”に日々叱られ、殴られている妄想から解き放たれない。70歳代後半にして、“未だに雇われの身”である父のことを思うと、辛くてたまらなかった。

その後もいろいろなことがあったが、父が認知症対応型のグループホームへ入所することになり、家族には“平穏な日々”が虚しく訪れた。私がグループホームを訪問すると、父はそれとなく微笑んでくれる。環境が変わって、私は“大将”でなくなったのかも知れない。そして、私がグループホームを出る時、父は少し悲しそうな表情で見送ってくれる。私は、罪悪感に似た、なんとも言えない気持ちを抱いて、父を残したまま自宅へ帰る。帰り道で、無理に視線を空へと向ける私から、意図せず、ため息が漏れる。

羽曳野市人権啓発推進協議会